

★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

春雷



イラスト：エーカ
文：レイラ・アズナブル

『僕は今になって思い出す。母の薄紫色した髪、透き通るようなピンクの目。妹の柔らかな草色をした肌、夢と愛が交錯する淡いピンクの目。そして父の……父だけの黒い髪、黒い瞳』

……そこまで読んで、僕はいったんそのノートを置いた。

僕、夏木涼（なつき りょう）のルームメイトの林野 柊（はやしの しゅう）。この字は確かに彼のものだ。

が、彼は決して空想好きではなかった。いやそれとも、いつでも空想の世界を見透かす目をして、無口に自分を守り続けるタイプ、と言った方が正しいのかもしれない。とにかく、こういった架空の話をわざわざノートにしたため、僕の机の上に置いておくような奴じゃなかったはずだ……。

『僕は今になって思い出す。父と僕だけの黒い髪、黒い瞳。』

生まれてから16年間、僕を育てた世界には、黒い色など僕ら以外には持つていなかった。だから、たくさんの見知らぬ人が僕の髪に触れたがった。

けれど人々はやさしかった。僕は一度も傷つけられた事が無い。笑顔で、ぼうやに幸福が：とか、ありがとう、また会いましょうね、と言いつい、何度も振り返りながら手を振った。希少な存在ではあったが、決して忌み嫌われる存在ではなかった。どんな色の肌も髪も、黒以外は僕の故郷では珍しくなかったからだ。沢山の色が、決して他を犯そうとはせず、けれどひとつひとつ輝きながら存在した。

僕は今になって思い出す。幸福な客人だった父の事を。

父の見ていた、窓の外を流れる激しい雷雨の事を。

春先の激しい雷雨の音に目覚めた僕は、泣きながら廊下に出た。窓の下に、父の長い影が伸びていた。まだ8歳だった僕は声を失い、その手に触れた。冷たい。

「部屋に戻りなさい。お前を連れて行きたくは無いです」

父は低い声で言った。

「どこへ？　ねえ、どこへ行くの？」

「……行かないよ。どこへも行くつもりは無いですよ。安心して寝なさい。さあ……」

僕は父の足にしがみついた。僕の頭を撫でる父の大きな手、その手に染みタバコの匂い。力を込めて僕の頭を抱き、それから柔らかく押

し戻す。僕の目の高さまで降りて来て、笑顔で言った。

「どこへも行かないよ。パパの大事なシュリエを残してね」

部屋のドアのそばで振り返ると、父はまだ窓の下で雷雨を見ていた。稲妻が、罪人のように父を貫き、長い影が廊下に伸びた。目を閉じたベットの途中で、しかし父はまだ外を見ていた。

「シュリエ！ シュリエ！」母が台所で僕を呼ぶ。

「パパはどこ？ お前知らない？」

「パパはどこって？ 僕は知らない！」

泥だらけの僕は庭で答える。

「行ってしまったのかしら？ 行ってしまった？」

それでは、あの人はもう……」

台所で母は泣いた。紫色の髪の中で僕の指が踊った。あの夜から、まだ3日しかたっていない

かった。

『どこへも行かないよ。大事なお前を残して』
父の葬儀の日に、草木はいっせいに萌え始めた。

妹は、8歳の僕よりも大人だった。その妹に片手を支えられ、母は葬儀を耐えた。手に手に沢山の草木を抱え、華やかに人々は丘に登った。その列に少し遅れて母と妹が、その後から僕が行った。草木と人々の髪と。考えられる限りの色の洪水の中で、今、ひとりの人間の存在に終止符が打たれようとしているなんて。カラッポの棺に、僕らが持ってきた色とりどりの葉が詰められ、それが父の代わりだった。誰もがいつか父が行ってしまうのを、知っていたに違いない。

父を失っても、日々は以前と変わらなかった。毎年の初春の雷雨。その後には萌え出す草木は全

て1年の命。夏にはそれらがいつせいに花開き、実を結ぶ。薄紅色の葉の陰で、薄黄色の実が揺れる。その隣のオレンジ色の花は、まるで小さな子供の手招きだ。

人々はその間を漂いながら花を集める。手にかごを持ち、食べられる花とそうでない花をより分ける。故郷の冬は厳しい。秋が来て、風が花を散らす前に、人々は1年の食料を蓄える。風が吹く季節になると、風にあおられて花弁は毎日空を舞う。紙吹雪だ。小さな妖精達が、踊りながら、行く季節に別れを告げる。

やがて白い秋。

自然はその色を失っていく。脱色作用は動物にもおよび、人々さえも、じよじよに白くなっていく。妹も母も。父と僕だけが変わらなかつた。

毎日のように、父と僕は丘に登り、日ごとに色を失っていく世界に見とれていた。植物は季

節の深まりと共に、さらに色を失って行く。白から銀白へ、銀白から透明へ。そして冬。

冬には何も無い。自然はその姿をほとんど失ってしまう。人々はそれぞれの家で、色の復活を待つ。最も長い季節、冬が終わる時、激しい雷雨が死んだ自然を押し流す。春はもう目の前だ。そんな季節に、父はいつも窓の外を見ていた。そして僕が8歳の時に行ってしまったのだ。

10歳で妹は結婚した。式が終わった後で、母は僕を呼び寄せて言った。

「おまえはお父さんの血を多く受け継いでいるから、皆と少し違うけれど、心配しないでいいのよ。人と違う人は大勢いるのだから」

その通りだった。たった6歳で親になる者もいる。13歳になつても、まだ成長を続ける者もいる。

「黒い瞳も、黒い髪も、みなお父さんの物よ。

お前もお父さんと同じよ。いつか行ってしまう。どこだかお母さんには分からないけれど。ある日、雨上がりに、庭にお父さんが倒れていたわ。それと同じよ。雷の激しい日に、私を置いて、行ってしまうのだから」

あの夜の、長く伸びた父の影。涙が出そうになって、母のひざに顔を埋めた。

「行きはしないよ、ママ」父もそう言った。

『行きはしないよ、シュリエ。大事なお前がいるから』

僕も行ってしまうと母は泣いた。

16歳の時の雷雨で、僕は初めて行ってしまうという言葉の意味を知った。友人との電話の最中に、庭に雷が落ちた。嫌な気分が続き、もうこんな家に居たくないと言った。友に告げた時だった。一気に世界が消え、別の世界に僕は放り出され

ていた。手に持つ受話器の先は空中で消え、受話器も手を離すと、地面に落ちる前に姿を消した。

混乱した僕は、ただむやみに元の世界を取り戻す事を考えた。その時自分がいる世界ではない、別の世界へ移る事を。お陰で僕は、短い、たった3ヶ月の間に、6回住む世界を変えた。旅立つには、多少なりと自分の意思が影響するらしいと気がついてから、僕は新しい世界に慣れるように努力をした。

故郷では、僕の葬儀も済んだだろうか。母はやはり妹に片手を握ってもらったのだろうか。そして、僕は、僕と父は、いつか母の元へ帰れるのだろうか。

旅立つごとに、世界はそのやさしさを失っていく。淡い色が無くなり、逆に暗い色が増えた。季節がめまぐるしく替わる所もあった。人々の

背の低い所もあつた。だが、どこもここよりま
しだった。ここが最も住みづらい世界。高慢、
偏見、鼻持ちなら無い優越感が蔓延し、僕は理
由の無い劣等感に悩まされている。髪の色も、
目の色も、ここでは皆と同じなのに、一番自分
に似た人々の住む世界なのに、どうしても僕は
なじめなかつた。そしておかしな事に、僕以外
の皆もそうなのだ。誰もがこの世界の住人なの
に、皆異邦人なのだ。だれもが自分を愛してい
ない。故郷の人々のように周りの全てを認める
事ができない。自分が他人と違っている所を探
すのに精一杯なのに、他人が自分と違っている
事を許せない。裏切り、争い、殺りく、戦争。
どこよりもここは……』

気がつくくと、ドアが開いていて、柎（しゅう）
がそのそばに立って僕を見ていた。僕が彼を見

ると、彼は顔を赤らめ、下を向いたまま動かな
くなつた。思いがけない待ち伏せにあつた時の
ように、僕は苛立ち、喉がこわばり、声が勝手
に出て来た。

「薄紫色の髪をした母親だつて？ そんなのが
きみの趣味なの？」

そんなにこの世界が嫌なら、別の世界へ行き
たけりや、さつきと行つてしまえばいいのにさ」
弾みがついた言葉は止まらなかつた。柎は目
を見開き、僕のそばまで飛んで来てノートをひつ
たくり：僕はぶたれると思つた：何も言わずに
ドアを音を立てて閉めて出て行つた。あんなに
怒つた彼を見るのは初めてだった。

彼は遅くまで部屋に戻らなかつた。彼が点け
たテーブルランプの明かりで、僕は目を覚まし
た。夜の中を静かに移動する彼は、影に近く見
えて、そのまま本当に別の世界へ行つてしま

そうだった。

自分で思っていたよりもすんなりと言葉が出て来た。

「悪かったね」

影が震えた。眠気に捕らわれて、僕は優しい気分になっていた。

「あんな事、言うつもりは無かったんだ…。ちよつとびつくりして…」

「いや、いいんだ」

「きみつてきつと、僕が思ってたのよりいい家庭に育ったんだろうね。優しい家族がいてさ…」

「そうかもしれない」

「…僕にも母親がいるんだ。僕が小さい時再婚してね。その時僕は祖父母に預けられて、それつきり会ってないんだ。預けられてすぐ祖母が死んだものだから…。母親っていいんだろうね。」

彼女、僕がここにいるのは知っているはずな

んだ。お金を出したのは彼女の夫のはずだし。

おじい知らせたつて。僕は知らないけどさ」

柊がそばまでやって来て僕を見ていた。僕は彼の顔を見たくないのでもまふとんのはしを見ていた。

「妹の写真をね…半分しか血はつながってないけれど、妹だからね。小さい時のじゃなくて、大きくなつてからのが欲しいつて言つたんだ。おじいに頼んだんだけど、だめだつて言われた。町で会つても判らないのがいいんだつて。僕の母さんがそう言つたんだつてさ。」

妹と僕はみつつしか違わないんだ。母さんと別れたのは僕がふたつの時だったし、もうどこで会つてもわからないね。それはいいんだけれど…」

「知らなかったよ」

彼がベットのほじに腰を下ろし、僕の顔を覗

き込んだ。僕はふとんの中に潜ろうとし、ベッドがきしんだ弾みで、少し悲しくなった。

「きみの小説ね。読んでたらみんな思い出したよ。僕はいつでも家族が欲しかったんだ。いつでも悲しんでたんだよ」

「もういいよ。言う事ないよ」

彼の手が僕の髪に触れて、僕はまた眠くなつた。

「さみしかった…耐えられなかった…友達にうそをついて、いつだって陽気に…」

言うつもりは無かった。一生、口にするはずの無い言葉だった。僕は泣いていた。それから、彼が僕の隣へ入って来て、僕の祖父がしてくれたように、僕の頭を抱えてくれたのは、きつと夢だったに違いない。朝起きると彼はもう校舎のほうに行っていた。

僕のいる学校は、大学と高校と、両方の寮が同じ敷地内に在るので、結構広くて、はしには小さいけれど林までできていた。最近の僕は、友人から離れ、その林の木陰ですごす事が多くなっていた。偽りなく言えば、僕は自分の言った言葉に驚いていた。

悲しんでいたって？ 僕が？ 家族が欲しかった？ 母親が…。

足元で積もった枯葉が音を立てる。柎に言うまでそんな事、考えた事は無かったが、言ってしまうたら、全部真実になった。本当は、そうだったのかもしれない。小さな妹の写真を見た時も、僕は泣かなかつた。新しい妹の写真を母に拒絶された時も、祖父が死んで僕の中の家庭が壊れた時も、僕は泣かなかつた。

それでも僕は悲しんでいたのかもしれない。憎む事をやめた時に、愛する事もやめたのかも

しれない。いつかはひとりで生きなければならなかったのだから。それも、できるだけ早く、ひとりで生きられるようにならなければいけないのだから。いつもそう思っていた。

けれど、それは今だつて変わつてはいない。早く忘れなければ。柊に言った事は早く忘れて、早く今までの自分に戻つて…。

「涼、サツカーに入らないか？」

「あ ああ」

「なあ、ひとり足りないんだ」

以前はなんでも僕から始めていた。

「悪いな。他にいないか？」

「だと思つたよ。またな」

彼が走つて行く先で校舎が光を放ち、その光の中でクラスメイト達が手を振っていた。1週間もすれば、だれも僕など誘いに来なくなると思っていた。

大きなけやきの木の根元に腰を下ろす。意外に自分は頼りない人間だったのだろう。胸の中が重さを失つていく。目を閉じたまま上を見ると、木漏れ日が目の底を撃ちに来た。ああ、懐かしい温かさが戻つて来る。

「涼…」

振り返ると、おずおずと柊が立っていた。

「きみか」思わず声が硬くなる。

このところ彼は、何かと僕に話しかけようとしていた。彼が僕の後ろに腰を下ろす。決して僕と目を合わせようとしない。僕も前を見たまま黙っている。

「涼、僕はきみに謝りたいと思つていた。僕は自分の事しか考えていなかった」

彼の静かな口調には、落ち着きと、それと同じくらいのアきらめが混じっていた。

「いいやいいんだ。僕も同じさ。いや、僕の方が

もつと悪い」

「僕はもう望まない事にしたよ。」

ただね、きみは僕の父に似ていたんだ」

さらさらと枯葉が降る。…父。柗と父。そのまま黙って、時が行くのを数えていた。僕の方が先に苦しくなり、柗に聞いてしまった。

「きみの家族のね、話をしてくれないか」

「……」

「いいだろ？ 切り札はきみが持つてる。僕の…家の事。きみが、きみの家族の事を話してくれば、僕らは同じになる」

「そうだね。」

そう…。父は異邦人だったよ。そして、母の元では幸福だった。母は、いつか父が自分を捨てる事を知っていたはずなんだ。それなのに母は、ずっと父を愛していたよ」

僕の胸ににがい想いが湧く。

「そのね。家族とどこかへ行ったりした？」

「どこか…。ピクニックならよく行ったよ！」

母さんがケーキを焼いて、妹が飾り付けをしたんだ！」

かんだ枯葉は口の中で割れた。

「花が咲く前の方が、花の咲いた後よりもきれいだったよ。僕の故郷には低い山が沢山あってね。みんなその時期になると、家族連れで出かけたよ。僕の家の中にも山があって、登るのに1時間ぐらいかかったつけ。家の周りにはあんまり高い木は無いんだ。山にだって腰くらいの高さの木しか無いんだ。」

登って行くのはいつも父が一番後ろでね、妹が一番前。いろんな色の草や木の中で妹の髪が揺れるんだ。妹はいつも途中でねを上げてね、パパにおぶってくれてきかないんだ」

枯葉の味が胸にまで広がってきて、急に息苦

しくなる。

「きみはいつもパパってよんでいたの」

「えっ？」

「今、そう言った」

僕の声の中にトゲが混ざり、そのトゲが僕と柁を刺した。

「パパに捨てられた時、何を考えた？」

「パパはなんできみらを捨てたのさ！」

柁のこわばった顔が、僕がそれ以上の醜態を演じるのをとめてくれた。教室に戻る間、僕は柁になんと謝ろうかとそればかり考えていた。その僕に、柁はささやくように言った。

「きみを見損なっていたよ。二度と迷惑はかけない」

僕より、何歳も年上の男の声だった。

今度は僕が彼を探す番だった。授業が終わる

たびに彼の後を追った。だが、いつもきれいにまかれていた。彼は部屋にも戻って来なかった。

2日間、僕は彼と話す時間を作ろうと努力をし続け、3日目にはほとほと疲れ、一体自分は躍起になって、彼に何を話そうとしているのだろうと思いついていた。重苦しい気分で授業を終え、部屋に戻ろうとすると、寮長が来て、彼の部屋を替えた事を告げた。

「異論は無いと思う」

寮長は最後に慇懃そうにそう言った。彼の目の奥では、好奇心が光っていた。

「ええ、僕は別に」

疑問を飲み込んで、僕は答えた。面倒だった。これ以上彼に関わって、自分の醜態を見たくなかった。

部屋は思ったよりも前と変わってはいなかった

た。机とベットとロッカーが作りつけだという事を差し引いても、柊が占めていた空間の狭さに驚かされた。いつもそうだったのだろうか？

部屋でも？ 教室でも？ ルームメイトになつて1年半。おじいさんが死んでから、休暇になつても寮に居た。柊も家に帰らなかつたので、人よりも長い時間を共にすごしたはずなのに、彼は僕になんの関心も持たせなかつた。

いつから彼はあの小説を書き、僕に見せる氣になつたのだろう。一風変わつていたし、最後のほうは主観が入り過ぎていたけれど、ほめてやれば良かった。多分、彼が初めて自分からした働きかけなんだろう。愛すべき母親と妹、愛すべき自分達を捨てた父親……。どこまでが真実で、どこからが作り物なのだろう。家族を知らない僕と父親を失つた彼。僕らにどこか似たところがあつたのだろうか。父親は僕に似ていた

という。もしかして、それが彼に僕を選ばせたのかもしれない。

それにしても、こんなふうに行つてしまうのはあんまりだ、と僕は思った。最初に逃げたのは僕だ。感情に任せて、彼に詰め寄つたのも僕だ。それなのに何も言わず、僕の話だけを聞いて行つてしまうなんて。何か言いたい事があつたはずだ。僕はまだ何も聞いていない。

窓から見える空は曇り始めていて、時間より大分遅く感じさせた。もう校舎側に残つている生徒はいなかつた。氣の早い寮生は、メシを食に行つていよう。

寮長の部屋は、寮の一番はじに在つた。幾分生徒のそれよりも広めで、中の家具も多い。寝室は別にあり、そのふた部屋をひとりですべて使つていた。はるか昔から、寮に関する権限のほとん

どを彼が握っていた。その権力の大きさを示すように、彼の部屋のドアは重い両開きで、ライオンをかたどったいぶし銀のノッカーがついていた。このノッカーをたたく時、いつも僕は胸の奥が冷えていくのを感じる。

ドアを開けると、寮長は袖のついた机に向かい、分厚い本を読んでいた。

「お忙しいところ、失礼します」

「なにか用かね」

そう言いながら、彼は椅子を重そうに回し、僕の顔を正面から見た。

「きみか。確か…夏木涼君。座りたまえ」

背もたれの無い真四角の椅子で、この部屋に来た生徒は必ずこれを使わされた。

「その、柎の事で。ルームメイトの林野柎です。

彼がどうして部屋を替えられたのか、もし教えていただけたらと」

「きみ。夏木君と呼んでいいかね。夏木君は林野君の生い立ちを知っているかね？」

「いいえ、ほとんど」

「彼はこの高校に入る3ヶ月ほど前に、警察に保護された。記憶喪失だった」

「！」

それでは、愛すべき母と妹の話はなんなの？
彼を捨てた父親の記憶とは。

「そのちよつと前に降った夕立でびしょ濡れになり、栄養失調で倒れる寸前だった。身元を明かすような物は何も持っていなかった。ところが、調べるとポケットの中にダイヤの原石を幾つか持っていた。それで警察は、身元は簡単に調べられると思っていたようだね」

寮長はまるで楽しんでいるかのように話し続けた。

ダイヤ？ 夕立？ 雷は？ 雷は鳴っていた

のだろうか？

「しかし、いまだに彼に関する情報は何ひとつ無い。最終的にダイヤは彼の所有するところとなり、その1個を売って、彼は寮の設備のある我が校が預かる事になった」

紫色の髪をした母は。家族を捨てた父は。

どこまでが事実で、どこからが創作なのか。

「彼が現在自分が置かれた立場に対して、どんな感情を持っているのか。それは我々の私情の及ぶところでは無い。しかし：彼は3日前私の部屋に来てこう言った。夏木涼：きみの事だ。夏木涼を愛している。部屋を替えて欲しい」

僕は顔が赤くなるのを感じた。寮長の目が僕をつかんでいて、僕は動けなかった。寮長が柵の部屋を替えたと言った時に、彼の目の中であつた好奇の色の源はこれだったのか。

彼はゆっくりと腰を上げると、僕から背を向

け、窓の外を見た。組んだ手が絵のように彼の背に留まっているのを僕は見ていた。

柵の言った事はうそだ。なぜ柵が、僕を愛しているなどと言えるのだろうか。

「きみらの年代ではままだ事だ。まして、彼のような境遇ではなおの事だと思う。きみの家庭環境が、きみらを同室にした理由だったのだがね…。

しかし、彼の事はできるだけ早く忘れなさい。きみには災難だったかもしれないね。彼の事は学校側には報告しない事にした。心配しなくていい」

大きな手で、彼は僕の背中を押して部屋から出し、おやすみ、と言ひ、僕の背中ドアを閉めた。腹立ちだけが心に残り、部屋に戻る間、僕は想像の中で何度も寮長の顔を殴った。

何時だろう。激しい雨の音で僕は目を覚まし

た。部屋の中の空気が重さを増して、窓の外では弾けていた。カーテンを開けなくても、外が雷雨なのがわかる。光が部屋を照らす度に、自分がひとりなのが事実として迫ってくる。

「どうしてこんな季節に？」

わざと声に出して言った。その声が雨音に消される。寒さが布団の中にまでしみこんで来た。苦い思いが胸に満ちる。

闇雲に柗の顔を思い出した。色白の、ほとんど表情を表さなかった彼が、僕を愛していると云ったって？ 違う。彼の言いたかった事はそんな事じゃない。紫色の髪をした母。ピンクの目をした妹。どこかに何かが隠れている。

光と音が同時にやって来た。柗はこの雨に気づいているだろうか。この雷を、どんな気持ちで迎えているのだろうか。彼は、今なら本当に行ってしまうだろう。

廊下はほとんど何も見えなかった。柗の部屋はどこだろう。手探りで東へ向かう。寮長は多分、柗を自分のそばへ移しただろう。本廊下には窓があるので、もう少しまわりがわかるだろう。

角を曲がると、いきなり柗が立っていた。窓に向かって、かつて彼の父がそうしていたように、神の怒りを待っていた。振り向いた彼の目は、僕を通り越して、別の世界を見ていた。ああそうだ。入学した頃の彼は、いつだってこんな目をしていた。

「柗、きみがどうしているかと思って。」

…寮長に聞いたんだけど、…同性愛なんて、うそだろう？」

「ああ。でも、ひとり部屋は手に入った」

立て続けに雷が鳴った。雨は少し小降りになっている。雷光にさらされた彼の目に脅えが見えて、僕はおもわず目を伏せた。

「きみが書いた事、信じてもいいよ。」

全部、本当の事なんだろう？」

空気が雨に混じって溶け始めた。時間が何倍にも延びて、床ばかり見ている自分が不自然に思えてきた頃、やつと柊が言った。

「そんな……」

そんな事、あるわけが無いと言いたかったのだろう。柊の体から力が抜けて行き、代わりに別の物が彼の心を捉え始めた。

「涼、きみ寒くないかい？」

「ああ、少しね」

「ココアをいれるよ。僕の部屋に来る？」

「ああ、いいよ」

柊の後ろを歩きながら、僕は自分の部屋に忘れ物をしているような気になった。

今頃の季節になると、自分の家に帰ってしまいう生徒が増えるので、柊にも部屋がひとつ与え

られたのだろう。

「きみつてほんとに荷物を持ってないんだね」

「必要な物つて、案外少ないもんだよ。」

それに、持って行けるものは少しだしね」

慣れた手で、柊はふたり分のココアをいれた。

「お飲みよ」

「うん。：雨が上がったからもっと寒くなるね」

「そう？」

「記憶喪失つてうそだろ？」

「ああ。本当の事を言っても、信じてはもらえないだろうしね。」

あれこれ聞かれるのは、面倒だ」

「きみみたいのさ、なんて言ったらいいのかな？」

「旅の事？」

「うん。旅つてよんでるの？」

「まあ……。他にぴったりくる呼び名も無いし。そうねえ……。なんて言ったらいいんだろう。S

Fマニアなら、多次元とかなんとか言うんだろうね。なんだろう？ でもね、なんとよぼうと僕には僕の存在の方が大事だよ。

それに、ここには長くいられそうだから、勉強しようと思つてこの学校に入学したんだけどね、結局よくわからないね。僕はなんなのだろう？ もう故郷に帰れるとは思つてはいないんだけどね」

僕は、柊の言葉に、あまり抑揚が無い事に気がついた。注意していないと、感情の起伏さえも、見過ごしてしまいそうなほどだった。彼とはここ数日、ずいぶん話をしたように思つたけれど、こんな事にすら気づかずにいた。

もしかして、僕らは似た者同志なのかもしれない。もしかして柊も自分を悲しんでいたとしたら、そしてふたりともなにもかもを、これから創り上げなければならぬのだとしたら。

もしかして僕らは…。

「こんなに長い事、ひととここにいられたのは初めてだよ。だんだん長くなっているんだ。少しずつこつを覚えてきてるんだろうね。

だけど、いつまた父のように飛ばされてしまふかわからないしね。何か、ここに確かに自分が居たという証みたいなのを残しておきたかったんだ。それで、あんな物を書いたんだけど、きみには迷惑だったかもしれないね」

「そんな事ないよ」

「信じてもらいたかったけれど、信じてくれるとは思つてなかったよ」

僕は恥ずかしくなった。まだ、本当に信じたわけでは無かった。記憶喪失と一緒に、別の記憶が埋め込まれる事だつてあるだろう。ただ彼に近づくには、まず旅の話を受け入れる事が必要だと思つただけなのだ。

「柊、僕らは友達になれるかもしれないね」

うそではなかった。僕らは理解し合えるはずだ。

「そんな事……。きみにそんなふうについてもらえる資格なんて、僕には無いよ。きみが泣きながら眠ってしまった夜に、きみは何度もおじいって僕をよんだよ」

僕はまた、恥ずかしくなった。おじい。

おじいの手の暖かさと柊の手の暖かさを思い出す。

「それまでは、僕はきみを一緒に連れて行くつもりだったんだ。それもただ、きみに家族が無いって聞いただけで。きみが姿を消しても、だれも悲しむ人はいないと思った」

「連れて行く事ができるの？」

「身近にあるものならね。多分、人間でも同じだと思う。きみがいやがっても、僕は連れて行

くつもりだった。卑怯者だよ、僕は」

裏切られたとは思わなかった。あの時僕らの間には、なんの約束も無かったのだから。実際、僕が姿を消しても、泣く人などいないのだから。

「ねえ、柊。きみはもつと自分の事を話すべきだよ。僕も話すから。」

そしたら、何もかも良くなるかもしれないよ」
「そうだね。：僕にそんな時間が残っているかわからないけれど」

ココアのカップに目を落としながら、柊は言った。ココアが僕の体を温めていた。雨音が小さくなっている。僕はすっかり幸福な気分になっていて、不可解な友人、柊が、小さな子供のようには思えた。

「柊。ねえ、柊。泣いていいよ」

「僕は泣いてないよ。泣くなんて違う」

「ねえ。きみが行く時に僕がそばにいたら、連

れて行つてもいいよ」

柊が僕を見た。彼の胸が小刻みに上下して、彼が言葉を捜しているのがわかった。

もし彼の話が真実だとしても、と僕は思い始めていた。前に僕は、母に去られて悲しいと彼に話した。それは事実だった。けれど、口にした時から、僕には僕がひとりで生きてきた時間のほうが大切になっていった。今では、母を求めていた自分を懐かしいときえ思っている。それに、おじいの事だつて。

口に出して言つてしまつて、そして柊に受け止めてもらえて、僕は自分を知る事ができたんだ。柊と居る時間が長ければ、ここでも、あるいは別の世界でも、僕はあくまでも僕でいられるようになるだろう。そしてそれは、彼にとつても同じはずだ。彼も言つていたではないか。彼がどんな人間であろうとも、彼が彼である事

のほうが大事だと。僕らが一緒ならば、僕らは僕らでいられるだろう。僕らはどこに居ても、異邦人でなくいられるだろう。

「きつと、なにかもうまくいくよ。柊。

僕は全てを失つたと思つていたんだ。おじいが死んで、もうこの世に僕をつなぎとめてくれる人はいなくなった。そう思つていた。妹の写真も拒絶されたしね。

でも違つた。僕の中におじいの思い出があつた。僕が泣きながら眠つた夜、きみの手の暖かさの中におじいが居た。

きみもそうさ。きみの母親。妹。覚えているだろう？ きみを置いていった父親だつて、きみは愛してるんだ。きみのノートを読んで、僕はそう思つたよ。それが多分僕を傷つけたんだ。僕は僕の母や、妹の事だつて憎んでいたのに。

ああ、妹。今は会いたいなあ。名前も知らな

いんだ。

でも、柊。きつとなにもかもうまくいくよ。一緒に行っていいよ」

柊の目はまた感情を失い、僕を見たまま考え
ている。夜明けまでには、まだ充分時間があつた。
雨はすっかり上がっていたが、遠くで雷鳴がと
どろいていた。柊の手が僕の手をつかみ、引き
寄せ、彼の唇が僕の唇に近寄った。そして、最
後の稲妻が近くに落ちた時、彼は僕の手を離し、
次の瞬間彼の姿は消えていた。

長い間、僕の唇には、彼の吐息の感触が残った。
気づくと僕は泣いていた。柊がひとりで行つ
てしまった事に気づくまでには、もつと時間が
かかった。手の甲で涙を拭きながら、彼の部屋
の中を探し、あのノートを見つけ出した。自分
の部屋に持ち帰り、隠した。だれにも見せては
いけなかった。彼がこの世界に居たたったひと

つものしるしだった。これは僕だけのものだ。

なぜ、もつと早く、彼の存在に気づかなかつ
たのだろう。なぜ、もつと早く、彼と話をしなかつ
たのだろう。なぜ、僕はあんな事を言ってしまった
のだろう。僕のひと言が、彼をひとりで旅立
たせてしまったのだ。僕は何度も後悔をした。

柊の突然の失踪は、しばらくの間、学校をに
ぎわせた。どこからもれたのか、柊が身元不明
の記憶喪失者である事も、僕に失恋した事も、
うわさになった。しかし、寮長が学校へは正式
な報告をしなかったのか、それとも学校が、僕
を単なる柊の片思いの恋の相手としか解釈しな
かったのか、僕への正式な査問はなかった。

季節がいくつも過ぎた。柊。もうだれも、僕
以外、きみの事を覚えてはいないだろう。僕は
明日、妹に会う。母の代理人に会い、母に会い、

説得し、やっと成人した妹に会う許可を得た。ここまでの道のりは決して短くはなかった。でも、柊。きみのしている旅と比べたら簡単な事だろうか？

妹に会ったら、僕はきみの話をするつもりだ。大事な友人の献身があったから、僕は彼女に会えたんだから。僕が妹に会いたいなどと言ったから、きみは僕をこの世界に置いて、ひとりで旅立っただね。明日、妹にあったら、そしてきみの話を妹に伝えたら、僕の準備は全て終わる。僕は家族をみつけだし、きちんと別れを告げた。この世界ですべき手続きを全部終えたことになる。この先はだいじょうぶだ。僕はどこにいても、僕でいられる。僕は僕の人生を生きられる。

柊。きみはまだ旅を続けているのだろうか。家族には会えたのだろうか。きみと同じ髪と同

じ目をした、愛する父親には再会できたのだろうか。

もしその旅の途中で、また僕の世界に立ち寄る事があったら、僕を見つけ出して欲しい。きみが僕を見つけてくれたら、今度こそ一緒に行こう。きみが悲しむ夜には、きみの手を握り、きみの頭を抱き、きみの隣で眠ろう。かつてきみが僕にしてくれたように。

どんなに離れていても、今だって、きみはひとりじゃない。忘れないでくれ。きみはひとりじゃない。

春雷 終わり